

認め合うこと、高め合うこと



「こういうことができたらいいな。」

「こんなものがあつたらいいな。」

現代社会では、そんな思いから作られた “便利” なものが増えてきている。ただ、そのような便利なものだからこそ、使い方が大切である。”正しく”活用するには、そこに関わる人たちの気持ちを推し量り、正しく判断する力が必要と求められる。そんなものの代表に、スマートフォン（以下、スマホ）がある。

高校一年生のAは、入学を機に親に買ってもらった新しいスマホに夢中。中学三年生のときに、友達に誘われて学校説明会に参加して以来、学校の雰囲気や先輩方のかっこよさにあこがれて志望した高校に無事合格し、毎日電車とバスで一時間かけて通学している。通学の時の欠かせないアイテムがスマホ。音楽を聴いたり、ニュースを確認したり、好きなアイドルの動画を見たり。時には英単語の勉強もする。これがなかったら、きっと通学は退屈な時間だったろう。

また、中学時代と違って、同級生たちもみんないろいろな地域から通っている。クラスの仲良し五人グループのB、C、D、Eもみんなバラバラの町から通っている。そんな仲間とのやりとりも、いつもスマホ。遠くに離れていても、SNSではいつでもどこでも繋がれる。帰宅後はいつも、みんなでチャットをしながら、その日に学校であったこと、クラスの友達のこと、部活のことなど、他愛のない話で盛り上がったたり、みんなで大好きなアイドルの動画を見た感想を言い合ったり。家においてもみんなと一緒にいるみたいで、本当に楽しい毎日を過ごしていた。



そんな楽しい高校生活もようやく慣れてきた一学期の終わり、いつも一緒に遊んでいたEが、私たちに連絡もなく突然学校を休んだ。そして同時に、仲よし5人で作ったSNSのグループからも退室した。

「何かあったのかな……。」

Aは心配で、その晩、Eにスマホで電話をかけてみた。しかし、着信音は鳴るものの、Eは電話に出ない。時間をおいてかけ直してみても同じ。Eから折り返しの電話もない。

SNSのチャットで、他のみんなに連絡すると、BもCもDも皆それぞれ、Eに電話をしたり、ショートメールをしたりしていたけれど、返信がないのは自分と同じだった。

「Eのスマホ、壊れちゃったのかな？」

「でも、電話の呼び出し音は鳴ってたよ。」

「体調が悪すぎて、電話に出られないとか……。」

「そうだったとしても、親が学校に電話くらいするんじゃない？」

「何か事件にでも巻き込まれたとか……。」

その日は、夜遅くまで皆で心配して、チャットへの書き込みを続けていた。

「とりあえず、明日も学校だから、また続きは明日話そう。」

次の日も、Eは学校を休んだ。担任の先生も詳しいことを話さないで、クラスの仲間からもEの欠席を心配する声が聞こえてきた。その日の放課後も、それぞれが電話をかけてみたが、やはり誰も連絡が取れなかった。

その日の夜のこと。Aのスマホから、着信を知らせるメロディが流れた。名前を確認すると、ずっと連絡が取れなかったEからである。Aは慌ててスマホを取り上げると、すぐに電話に出た。

「もしもし、Eなの？急に学校休むし、グループからも抜けちゃうし。何があったの？」

「ごめん、心配かけて。でも、今は一人になりたくて……。それで学校も休んでいたの。」

「みんな心配しているんだよ。今日だってみんな何度か電話をして……。」

「心配してくれてありがとう……。でも私、どうしたらいいか分からなくて……。」

「何があったのか、私に話してもらえない？」

「うん……。Aなら、私の気持ち分かってもらえるかもしれない。」

そして、EはSNSのグループから抜けた理由を、言葉を選びながらゆっくりとAに語り始めた。

中学時代のEは、人に流されることが嫌いで、自分が納得いくまで話をしないと気が済まなかった。それが原因で、なかなかクラスメートになじめず、仲の良い友達ができなかった。でも、高校に入学してから出会ったAたち4人とはとても気が合った。そして、そんなAたちといつも一緒に過ごしたり、毎日スマホで繋がったりできることは、今まで経験したことがないほど楽しいことだった。

しかし、みんなとのSNSでのやり取りは、楽しいだけではなかった。ちょっとしたチャットのやり取りで納得がいかなかったことがあっても、その場の流れで調子を合わせなければならぬ。かといって、返事を返さないでいると、催促をするようなメッセージが来る。

(チャットの流れに合わせることも大切かもしれないけど、自分の本当の気持ちと言えないのは……。)

Eはチャットが始まると、いつもそんな複雑な気持ちを感じていた。

ある日のグループチャットで、Eが大好きなアイドルのことが話題になった。最初は他愛もない話が続いていたが、だんだんとそのアイドルの歌への否定的なコメントがエスカレートしていった。みんなが否定的なコメントを入れる中、Eは何度も「そんなことない！」とコメントをしようとした。でも、結局最後までEはその流れを止めるコメントができなかった。そのうえ、流れに合わせて絵文字を送る自分。Eはそんな自分にも納得がいかなかった。

「誰も私の気持ちなんて分かってくれない……。八方ふさがりになってし



まったEは全てが嫌になってしまった。そして、EはAたちのSNSグループから抜けることにした……。

「ごめん。Eの気持ち、全然分かってあげられなくて。私、みんなに今の話をしてもいいかな？Eのために役に立ちたい。」

「ありがとう。でも、私は自分の気持ちに嘘をついてまで、みんなに合わせるのは……。」

「私、Eの気持ちをみんなに伝えてみる。明日、みんなで話し合ってみるよ。」

次の日の放課後、AからEの話を聞いたB、C、Dは、皆一様に暗い表情だった。

B「なんか、Eって勝手に学校休んで？ ずっと私たち友達だと思ってたのに。勝手に悩んでいて、勝手にグループからいなくなってる、勝手に学校休んで。あんなにみんなまで心配してたのにさ。言ってくればよかったのに、本当はそのアイドルが好きだって。そういうことを言い合えるのが友達なんじゃないの？」

C「そうかな？ 友達だからといって、価値観はみんな違うものなんだし、そのことをお互いにあえて言う必要もないと思うけど……。」

B「確かにそうかもしれないけど……。私はEのこと、友達として理解していたつもりだったから、それは寂しいな。」

D「私……、Eって、自己主張が強いし、時々面倒くさいなって思っていたの。だから、いつもはEの話に合わせていたこともあったんだけど……。Eも同じ気持ちだったんだなあ。そういう意味では、私もEの気持ち、ちょっと分かるかも。」

A「何だか私たち、Eのことだけじゃなくお互いのこと、ちゃんと分かっていたのかな？学校でも、SNSの中でもみんな仲良しだと思っていただけ、違ったのかも……。」